

インドネシア伝統スポーツ フェスティバルの一考察

石 井 浩 一

問題の所在

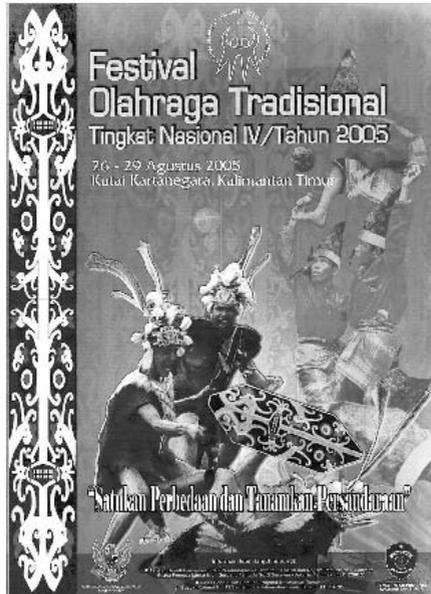
本稿は、2005年8月26日～28日、インドネシア共和国東カリマンタン州で行われた第4回伝統スポーツフェスティバル（Festival Olahraga Tradisional. 以下、FOTと称す）の概要を報告するとともに、FOT開催の意図について若干の考察を試みるものである。

筆者は、2005年6月22日～2006年4月5日まで外国派遣研究員として、インドネシアに滞在し、研究調査に従事した。研究課題は「インドネシアにおける開発と民族スポーツの変容に関する研究」である。入国当初は、首都ジャカルタに滞在し、各省庁で研究調査申請の手続きをする傍ら、研究課題に関する資料収集をしていた。FOTについては、青少年・スポーツ省で情報収集している際に、たまたま職員の方から伺った。FOTは、インドネシア共和国青少年・スポーツ省が主催し、主管は開催地の州政府が担当する。今回第4回大会は東カリマンタン州政府の主管となる。カリマンタンはボルネオ島のうち、南部約72%を占めるインドネシア共和国領の地名である。行政上は西・中部・南・東の4つの州から成り、人口は約1,100万人。「秘境ボルネオ」とも称されるこの島は、筆者にとって未踏の地であり、FOTがここで開催されるということは、絶好の機会である。今回の研究課題に資するところ大であることを願って、当地に赴くことを決めた。

筆者は1997年からインドネシアをフィールドとして調査を行っているが、

スポーツ人類学においてインドネシア研究は、まだ始まったばかりである。もちろん、FOTの先行研究もない。筆者は以前、インドネシアを「民族スポーツの宝庫」と呼んだ¹⁾。インドネシアは、5つの大きな島、すなわちスマトラ島・ジャワ島・カリマンタン島・スラウェシ島・イリアンジャヤ島と30余りの群島グループ合わせて約17,000の島々から成っており、約6,000の島々に人々が居住している。言語は約250。地方語まで含めると583あるともいわれる。

インドネシアは歴史を通じて、ヒンドゥー、イスラーム、キリスト教といった世界宗教を受容してきたが、それ以前の土着宗教が今日でも、山地・周縁部では比較的純粋な形で存続している。民族の総数は約300あるといわれるが、これはオランダ植民地時代の統計であって、インドネシア政府は、意図的に民族別の統計を公表していない。各々の民族が強調されることは、「多様性の中



資料 第4回インドネシア伝統スポーツフェスティバルのポスター

の統一」にとって、好ましくないと考えられているからである²⁾。インドネシアという群島国家に居住する民族集団は、その各々が伝統的な慣習を異にし、独自のエスニシティを持つ。こうした多様性こそ、インドネシアが民族スポーツの宝庫たるゆえんなのである。では、この民族スポーツの宝庫の中から、毎年各州より1種目ずつ参加させ、優劣をつけるFOTの意図とは何か。このことは、同時にインドネシア共和国のスポーツ政策の一端を伺い知ることにつながると考える。

本稿で用いた主な資料は、インドネシア滞在中に収集した文献資料および聞き取り情報である。なお本文中、特に注記を付していない箇所については、筆者の聞き取り情報に拠ることをお断りしておく。

I FOT とは何か

インドネシア語で、スポーツをOlahragaといい、Festival Olahraga Tradisionalは「伝統スポーツフェスティバル」と訳される。FOTは2002年に第1回が首都ジャカルタで開催され、第2回バリ、第3回ヨグヤカルタ。そして、今回の東カリマンタン州の開催である。

筆者は、ジャカルタでの研究調査申請手続き、資料収集を大方終えて、8月3日からバリに入った。バリでは、当初の目的であった調査に従事していたが、それを一時中断し、8月24日、バリのングラー・ライ空港からスラバヤ経由で、東カリマンタン州バリッパパンのスピガン空港に向かった。到着後バリッパパンに一泊し、翌25日、バスとベモ（乗合タクシー）を乗り継いで、FOTの会場があるクタイ・カルタヌガラ県トゥンガロンに入った。

〈テクニカル・ミーティング〉

FOT第1日目はテクニカル・ミーティング。場所はFOTの実行委員他、多くの州代表団が宿泊するホテルの会議室。FOTの実行委員が司会進行を務め、プログラム、ルールの確認を行い、各州の代表から質問、意見等を受け付

ける。FOTに関する資料は、事前に各州の当該部局に配布済みであったが、実際にはFOT参加者に伝わっていない州がいくつかあり、重複説明をせざるを得ない事態となった。テクニカル・ミーティングでの確認合意事項は次の通りである。

1. マルク州と北スマトラ州からのスポーツ種目は似ているので、同じ日に行うと興味を損なう。したがって、別々の日に行う。
2. プログラムの編成は、どの種目をどこに配置するのが最もよいか、事前に検討した。例えば、火を使うパプア州の種目は昼ではよく見えないので、夕方に行う。
3. 準備時間は2分。マイクロフォンは4つで、1つはナレーション用。あとの3つは音楽の伴奏用。
4. ナレーションと実演は同時進行で行う。
5. 1チームは最大20人まで。
6. 15分を超過すると、減点の対象となる。
7. マジックは採点の対象外。

7. のマジックとは、呪術やまじないのことであるが、筆者の知る限り、インドネシアではマジックが伝統スポーツの文化要素となっている事例が多々ある。しかし、FOTでは実演発表のなかでマジックが行われても、採点の対象外とするということである。

〈実演発表〉

実演発表は、翌27日から2日間に渡って行われた。開会式の後、地元クタイ・カルタヌガラ県のダヤク族による戦闘舞踊が披露され、続いて各州代表チームによって採点の対象となる実演発表が行われる。2日間の演目は次の通りであるが、現地語名称では、想像がつきにくいと思われるので、左に現地語名称、右に筆者が近代スポーツの種目名を用いて創った名称を併記することにした。

第1日目

1. バントウン州

ウジュンガン (Ujungan)：素手および武器を用いての武術

2. ゴロンタロ州

トゥオンゴベ (Tanggobe)：スティック・バスケットボール

5名1チームの2チームによる。各選手は「孫の手」状のスティックを持ち、1個のボールを奪い合いながらすくいあげて、中央に吊り下げられた収穫用の籠の中に、入れ合う。

3. ランプン州

パク・スハ (Paku Sukha)：ラケット・バレーボール

4名1チームの2チームによる。各チームは、ネットを挟んで対峙し、2人1組を2つ作る。各組は巨大な布をラケットとして用い、ボレーで打ち合う。

4. バリ州

ムチュプット・チュプタン (Macepet-cepetan)：ブンチャック・シラット (インドネシアで広く行われている武術) の一種

5. アチェ州

ブンチャック・シラット・グロンバン (Pencak Silat Gelombang)：ブンチャック・シラットの種類

6. リアウ州

ブルブット・バンタル (Berebut Bantal)：枕ハンドボール

4名1チームの2チームが枕をボール代わりに用いるハンドボール。

7. マルク州

ボラック・バリック・トウンプルン (Bolak Balik Tempurung)：椰子殻裏返しリレー

5人1チームの2チームによる。2チームは2列に並べた椰子殻半分をはさんで対峙する。合図とともに、双方1番の選手から順に、殻を裏返してい

く。全部裏返し終えたら、たすきリレーしていき、裏返しの速さを競う。

8. ブンクル州

ラジョ・ラジョ (Rajo-rajo)：騎馬戦相撲

4人1組の2チームで対戦。各チームは、3人が互いに手と手を組んで三角形の土台を作り、残る1人が上に乗る。双方のチームは土俵の中で、相撲の要領で勝敗を競う。

9. 南カリマンタン州

ナイック・シガイ (Naik Sigai)：水汲み登攀運搬リレー

3人1チームの2チームに分かれる。双方合図とともに、竹筒で地上の甕の水を汲み、三本柱の塔に登攀し、頂上の大筒の中に水を入れる。入れ終わったら、すばやく降り、次の選手にリレーしていく。最後は入れた水の量で勝敗を決める。

10. ジャンビ州

チュ (Cu)：集団相撲

5人1チームの2チームが一斉に1対1の相撲を行う。相手を倒し、自陣に運び入れた数を競う。

11. スラウェシ・トゥンガラ州

ヘカン・サル (Hekan Salu)：石当てゲーム

2チームに分かれ、中央に立てた平石4個に手持ちの平石を当てあうゲーム。

12. 北スマトラ州

クダ・トゥンガン：馬跳び

各4名の乗り手チームと人馬チームを作る。乗り手チームは後方から助走して、人馬に乗っていく。人馬が途中でつぶれたら、人馬チームの負け。持ちこたえたら、立ち手と乗り手がじゃんけんして勝敗を決める。

13. 中部ジャワ州

セロック・マンチュン (Serok Mancung)：ラケット・ハンドボール

5人1チームの2チームによる。各選手はハイ・アライのラケットに似たものを持ち、ボールをパスしながらゴールにシュートを入れる。

14. 東カリマンタン州

クルバウ・クルバウアン (Kerbau-kerbauan) : 囚われ鬼ごっこ

6人の男性による。じゃんけんで鬼を決め、鬼は5本綱付きの輪の中に入る。5人は各方向に綱を思い切り引っ張り、鬼が脱出できないようにする。一方、鬼は必死に脱出を試みる。鬼が脱出した瞬間、鬼ごっことなる。捕まった者が次の鬼となる。

15. 東ヌサ・トゥンガラ州

マナ・ティカ (Mana Tika) : 蹴闘技

8名の男性が2人1組ずつになって行う蹴闘技。

第2日目

1. 西カリマンタン州

プラフ・ダラット (Perahu Darat) : ボートレース

3人1チームの2チームによる。水上でできないため、丸太を下敷きにしたの模擬ボートレース。

2. 中部スラウェシ州

ポリバ・プニ (Poliba Puni) : ダーツ

4人1チームの2チームによるダーツに似たゲーム。

3. 南スマトラ州

グトゥック・サンブット・ボル (Gutuk Sambut Bol) : 地上バスケットボール

5人1チームの2チームによる。中央制限区域内のバスケットにボールを入れあう。

4. 東ジャワ州

ケケット (Keket) : 相撲

朝鮮相撲（シルム）に似た相撲。双方腰帯をつかんで組み、足裏以外の部位が地面につけば負け。

5. ジャカルタ首都特別州

チンクリック（Cingrik）：ブンチャック・シラットの一種。

6. 北スラウェシ州

セロ・アンブル（Sero Amburu）：椰子殻半分を用いて行われる的当て形式のゲーム

7. 南スラウェシ州

マシンプ（Masampe）：ブンチャック・シラットの一種

8. 中部カリマンタン州

トゥラック・メンガン（Tulak Mengan）：ブンチャック・シラット及び相撲

9. 西スマトラ州

クランジャン・カンビー（Keranjang Kambie）：背囊バスケットボール

4人1チームの2チームによる。各選手は収穫用の籠を背負い、ボールをパスしながら相手選手の籠に入れあう。

10. 西ジャワ州

ブブユンガン（Bubuyungan）：男女5人1チームの2チームによる隠し玉当てゲーム

11. バンカ・ブリトゥン州

ルバン・バトゥック（Lubang Batuk）：球当てゲーム

男性4人の2チームによる。初め、攻撃権を得たチームの選手により、相手チームの標的となる選手が決められる。攻撃チームは標的選手にボールを当てるべくパスを回す。一方、守備チームは、標的選手が当てられないように守りながらボールをかわす。ボールが当たったら攻撃チームに点が入り、攻守交替する。

12. ヨグヤカルタ特別州

ガブリック (Gaprik) : 石当てゲーム

少年 3 人 1 チームの 2 チームによる石当てゲーム。

13. 北マルク州

シダック・エコル (Sidak Ekol) : リレー競走

少年 5 人 1 チームの 2 チームによる。椰子殻の缶馬を操りながらの折り返しリレー。

14. 西ヌサ・トゥンガラ州

ブランプラン (Belamperan) : 体当たり相撲

15. パプア州

バラペン (Barapen) : 焼け石渡り

以上、2 日間に渡って 30 州からの代表団による 30 種目が演じられる。これを審査員が採点し、優劣を決めるということになる。しかし、FOT を観察しただけでは、その意図を伺い知ることはできない。そこで次に、青少年・スポーツ省発行の要綱³⁾をみることにしよう。なお本稿では、要項の全部ではなく、抜粋を提示する。

1. 緒言

伝統スポーツとは、いまだ原初形態の残滓を有する地方の遊戯から発展、あるいはまた、地方の伝統となっているスポーツのことである。伝統スポーツは、インドネシア民族の発展、成長、統合にとって大変有効で、価値の高いものである。なぜなら、古来伝わる文化遺産というのは、今日まさに伝えるべきものであり、民族自身を強化する活動の一環として、より発掘され、発展させるべきものだからである。

そのためには、伝統スポーツに関する施策は地方毎で行われる必要がある。このことは、地方の伝統スポーツの担い手たちが声を上げ、それを地方自治体へ反映させるということを頻繁に行うということである。しかしながら、伝統スポーツの運営について、地方自治体ではまだあまり関心が高いと

はいえない。伝統スポーツを発展させ、その活動をどうするのかということ
を協議する特別の組織あるいは団体を持っているところは、まだまだ少ない
のである。…中略…2005年第4回目を迎えた伝統スポーツフェスティバル
は東カリマンタン州クタイ・カルタヌガラで挙行される。この間、伝統スポ
ーツを発掘し、開花させるに当たってはクタイ・カルタヌガラ県政府に御尽
力いただいた。また、政府以外の皆様方にもインドネシアのスポーツの発展
のために御尽力いただき、誠に感謝に堪えない。

2. 目標

- 1) 今回の FOT が範となるようにしよう。
- 2) FOT を通して相互理解を深めよう。
- 3) FOT 開催中に想定され得る種々の問題解決には、協力一致して対処し
ていこう。

3. テーマ：FOT を通して、我々は地球規模の競争のなかで力強いインドネ シアをめざし、スポーツ開発のシステムを再興する。

モットー：差異の統合と友好関係の構築

4. 参加者

インドネシアの30州から各20名。計600名。

5. フェスティバルとして行われる伝統スポーツ

FOT において発展させる伝統スポーツとは、いまだ教育省スポーツ局主
管の行事及び FOT で行われていない伝統スポーツのことである。そして、
このことが地方で生まれ、今後の発展が見込まれるスポーツの発掘というこ
とになるのである。

6. 伝統スポーツの評価と基準

FOT の目的とは、伝統スポーツを発掘し、発展させるためである。そし
て、伝統スポーツの評価は国民教育省スポーツ局社会スポーツ部によって出
された2002年のFOT要綱に基づいて行われる。すなわち、評価はスポーツ
種目のなかで、より多くの身体運動を要するものに重点が置かれるというこ

とである。評価基準は以下の通り。

1) 教育的要素を含むこと

- a. スポーツの形態で高い身体運動をもっているか。
- b. 人間の持つ様々な能力すなわち、精神面、誇り、スポーツマンらしい協調性、勇気、自分自身、相手そして自然と闘う力、これらを発達させるような運動構成になっているか。
- c. 思考能力を養うことを含んでいるか。

40点満点

2) 本質的に伝統スポーツの内容を含むこと

- a. 地方文化から発掘されたものであるか。
- b. 感動させ、魅了し、独自性を有するか。

20点満点

3) 芸術的要素をもつこと

- a. 動き、衣装、伴奏およびその装飾の全体的調和が図られているか。
- b. 美的要素を有するか。
- c. 観衆を魅了するものであるか。

20点満点

4) 次の特定条項を満たすこと

- a. 会場を最大限に利用しているか。
- b. 伝統スポーツ実演の説明文があるか。
- c. 実演は10～15分。
- d. 1チームは最大15名。

20点満点

審判団：主観的評価を排除し、客観的評価をするために、中央から約10名の審判を派遣。

審判会議：FOT会場において想定し得る様々な問題に対処するために、青少年・スポーツ大臣秘書官通達を経て、実行委員会によって

組織された。審判会議は、スポーツ、芸術・文化、教育の各専門家3名から成る。

7. 表彰

FOT参加者への表彰については次の通り。

- 1) 10チームにトロフィー授与
- 2) 最優秀3チームにトロフィー授与
- 3) 各州代表団全員に銅製の盾授与
- 4) FOT参加者全員に記念品授与

8. 委員会構成

FOT実行委員会は、関係各機関からの90名で構成される。

- 1) 青少年・スポーツ省
- 2) 東カリマンタン州教育局ならびにクタイ・カルタヌガラ県青少年課外教育・体育振興局
- 3) スポーツの専門家ならびに文化の専門家
- 4) 社会スポーツ団体

以上の抜粋から、FOTは第一に、各地方に埋もれているスポーツを発掘し、開発することが目的であることがわかる。そして、開発する場がFOTである。となると、筆者にはFOTとスハルト政権時代に始まった開発政策との関連がみえてくるのである。

II 伝統スポーツの開発

1949年に新興独立国としてスタートしたインドネシアの大きな課題は、国民統合と開発である。その双方にとって、民族問題は障害となる。インドネシア政府は、国内の民族集団および宗教間の対立を抑え、秩序と平和を保つため細心の注意を払っている。

1969年、「開発」(Pembangunan)を旗印に掲げた第二代スハルト大統領の下

で、第一次5ヶ年計画が着手されて以後、各次の5ヶ年計画が実行に移されてきた。開発は、経済部門だけでなく、社会・文化・政治・行政の各分野に渡る総合的な開発戦略を含んでいる。スポーツは開発政策のなかで、心身健全なインドネシア人開発のための重要な手段・要素として位置付けされている⁴⁾。

スハルト政権下の1976年から約20年に渡って行われた伝統スポーツの調査報告には、民族集団を強調しない方策が採られた⁵⁾。このプロジェクトを行ったのは、教育文化省歴史伝統価値局で、インドネシア各地の歴史や伝統的価値を掘り起こし、それを国民文化に統合する役割を担う部局である。すなわち、インドネシア各地のスポーツは、ある民族に固有のスポーツではなく、地域の伝統スポーツである。そして、地域の伝統スポーツは須らくインドネシアの国民スポーツであるという基本理念が読み取れる。したがって、伝統スポーツ報告書では民族別のスポーツという体裁は採らず、すべて地方ごとのスポーツとして編集されている。例えば、「西ヌサ・トゥンガラ地方の民衆遊戯」、「東カリマンタン地方の芸術と娯楽の用具」等々である。

筆者は、以前この報告書を論文で取り上げたとき、インドネシアの伝統スポーツ政策は記録化することで終わったのではないかと思っていた。しかし、そうではなかった。すなわち、地域のスポーツを掘り起こして調査し、記録化することで、開発は終わりではなかったのだ。実際の開発はFOTで始まる、という見方ができるのではないだろうか。青少年・スポーツ省によれば、実演発表を採点するのは、どの種目がインドネシアの国民スポーツ(Olahraga Nasional)にふさわしいかを定めるためであるという。さらに、将来的には学校教育の教材として導入する意向を持っているという。

結 語

本稿作成にあたっては、青少年・スポーツ省およびFOT実行委員会の方々から多大なる御協力をいただいた。ここに記して感謝する次第である。現在の青少年・スポーツ省に至るまでは紆余曲折があった。スハルト長期政権の後を

受けた歴代のハビビ、ワヒド、メガワティ内閣はいずれも短命に終わった。この間、スポーツ行政は再編統合を繰り返し、現ユドヨノ大統領になってからスポーツ行政を強化する体制が復活した。

インドネシアといえば、バドミントン強国と連想される方々が多いのではないだろうか。事実、インドネシア唯一の金メダルは、1992年バルセロナ五輪のバドミントンで獲得したものである。国際水準には遠く及ばないが、国内で最も人気が高いスポーツはサッカーである。島のどこに行ってもサッカーゴール（木を2本立てただけのもの）があり、ほろほろになったボールを裸足で追いかける子供の姿は日常の光景である。すでにセミプロによるリーグ戦も始まっている。野球はようやくジャカルタ、バリで始まった。その他毎年数多くの国際競技がインドネシア各地で開催されているが、記録水準で見た場合、近年は9ヶ国によるSEA GAMES（東南アジア諸国競技大会）でも下位に低迷するなど、課題は多い。

一方で、伝統スポーツをどうするのか、という課題がある。バドミントンやサッカーといった外来スポーツではなく、国内のスポーツをもってインドネシア人として統合するという大きな課題である。FOTは今年で5回目を迎え、南スマトラ州で行われるという。今後継続して行われるか否かは予断を許さないが、FOTの意図は、地域のスポーツの中から国民スポーツにふさわしい種目を選別・奨励し、インドネシア人育成のための手段とすることにあると考えられる。

文 献

- 1) 石井浩一 2002 キーノートレクチャー：インドネシア民族スポーツ研究の現状と課題，体育学研究 47号，pp.473-478
- 2) 石井浩一 2002 インドネシアの国内植民地主義と民族スポーツ政策（水野スポーツ振興会2001年度研究助成金研究成果報告書「アジアのスポーツ文化に及ぼした植民地主義の影響」所収），pp.63-72
- 3) KEMENTERIAN PEMUDA DAN OLAHRAGA REPUBLIK INDONESIA, PEDOMAN

FESTIVAL OLAHRAGA TRADISIONAL TINGKAT NASIONAL IV TAHUN 2005

- 4) 服部英樹他 1993 『新聞のインドネシア語』, 大学書林, p. 255
- 5) 石井浩一 2002 前掲1), p. 475 および前掲2), pp. 66-67